

ING

東横堀川



いま東横堀川は、みんなのINGを
積み重ねることで、変わろうとしています。

令和3年度

東横堀川における水都大阪の新たなシンボル空間創出調査研究レポート概要版

1. 調査

① 地域ヒアリング

モデル例実施に向けた地域のニーズや課題の把握に向けて、沿川の店主や町会長を対象に、ヒアリングを4件行った。

北側：平野橋付近の沿川店舗の店主

- 東横堀緑道の活用について、地元店舗の利用ニーズはあるが、許認可の手続きなどが分からない。
- マルシェなどの単発イベント利用は、自店を閉めて出店する必要があり、近隣の小規模な店舗にとっては負担が大きい。
- 店の近くでフェンスで囲われている場所を掃除したいができない状況にある。

南側：久宝寺橋付近の沿川店舗の店主

- まったく川に近づくことができないので、活用といわれてもイメージがわからない。
- 使える場所があるのであれば入ってみると面白い。
- 実際に水辺を使うところを一度見てみたい。

南側：沿川の連合町会長（金甌地区）

- 沿川に歩行者空間がつながることが理想。しかし、橋の下やなどの管理上の懸念はある。
- 末吉橋南（右岸）は公園整備がされているが、維持管理状況が悪く、現在は閉鎖されてしまっている。
- 昔は商売をしている人が自治会の運営を担ってきたが、そういった人が減っており、地域の運営の担い手に不安がある。

南側：沿川の連合町会長（南大江西地区）

- 最近整備されている本町橋あたりは明るくなって良くなった。北側は公園が整備されていてよい。もっと水辺を歩けるようになればよいと思う。
- 雑草や樹木・ごみが目につくため、きれいな状態が維持されるとさらに良い。
- 子どもの頃はドブ川のイメージであったが、水門が出来て非常に水質が良くなった。もっと水辺を生かした整備になってほしい。

② 大阪市建設局河川課意見交換会

(1) 目的

・護岸改修をきっかけとした東横堀川のハード整備方針を検討中の河川課と情報交換や意見交換を行い、ハードとソフトが連動し、官民が連携した取り組み推進の方向性を探る。

(2) 実施概要

- 第1回 8月3日(火) 15:00～17:00 ○東横堀川の整備ビジョンの検討状況、本調査の計画について共有
第2回 1月7日(月) 16:00～18:00 ○今後の予定の共有、官民連携による推進方策について意見交換

(3) 参加者

河川課、水都大阪コンソーシアム、(株)ワイキューブ・ラボ

③若手ワーキング

■開催概要

(1)目的

・多様な視点から東横堀川のシンボル空間創出に向けた意見を把握するため、東横堀川に関心を持つ20代～30代の若手ワーキングにより自由な発想の意見を収集する。

(2)実施内容

・内容
クルーズ・現地踏査を踏まえて、自由な発想で東横堀川を活かすアイデア出しを実施。

・日時：11月20日(土) 9:30～17:00

第1部 クルーズと現地踏査

- 9:30-10:30：東横堀川～道頓堀クルーズ
- 10:30-13:30：現地踏査(3エリア別)

第2部 グループワークと発表・意見交換

- 13:30-15:30：各チームでグループワーク
- 15:30-17:00：発表・意見交換

・参加者：16名(当日欠席1名)

土木学会・東横堀川コンペ入賞チーム
大阪商工会議所職員、大学生、高校生 など

■議論のポイント

- 川への関心を高めたいという意見が多く、ハード面では親水性の高い歩行者空間や川とまちをつなぐアクセス路の整備というアイデアが多かった。ソフト面では、美化活動やアートなどのイベントによる川への意識づくりアイデアが出た。
- 水に近づけるだけでなく、触れたり、入ったりしたいという意見が多く、親水への意識が高い。
- 河川や水辺を多様性を受け入れる場所として捉え、周辺地域や周辺の商店街などを巻き込み、多様な人（多国籍など）や活動の場として活用していくアイデアが出た。



チームA
葎屋橋・土佐堀通
～本町橋・本町通

チームB
本町橋・本町通～
末吉橋・長堀通

チームC
末吉橋・長堀通～
道頓堀川



④有識者会議

■開催概要

(1)目的

・モデル例の企画アドバイス・検証・評価やシンボル空間創出の在り方の検討について、専門的視点からの意見を把握する。

(2)実施内容

- ・第1回：現地視察・意見交換(8月20日)
- ・第2回：モデル例の実施結果を踏まえた意見交換(12月27日)

■議論のポイント



河川空間の現地踏査



有識者会議の様子

有識者	所属	専門
武田重昭	大阪府立大学 緑地計画学研究室	ランドスケープ・都市計画の視点から公共空間の運営のあり方や、東横堀川の新たなシンボル空間創出について知見を得る。
紫牟田伸子	SJ事務所	「ものごとの編集」の視点から、東横堀川の新たなシンボル空間創出における社会・地域に適切に作用するデザインやコミュニケーション戦略などについて知見を得る。
松枝展弘	(株)良品計画 執行役員 京都・奈良・南大阪事業部長	地域との協業をテーマにした無印良品の新しい形態の店舗開発を担当。企業の視点から、官民連携のあり方や、地域との連携のあり方など、新たなシンボル空間創出について知見を得る。

- 人の意識や都市を変える時に光景・スペクタクルも大事だが、日常がどう豊かかと言う情景の方が次の20年には大切ではないか。
- みんなでこの川を使っていくにはどうしようかと言う「ing」の20年間のビジョン。
- シンボルというと建物など何かを作らなければいけないという発想ではなく、土面などここで何かしたくなるという設えが大切。
- 水都大阪を「水と緑の都大阪」に。水のネットワークはできたが、緑のネットワークがない。人が歩ける様なパークコネクターとして繋げていく事ができればこれから20年間の水都大阪の方向性としてはすごく良い。
- ロンドンからスタートした国立公園都市の取り組みは、自分の街に対して環境に優しい都市としての誇りを感じられるようになるという利点がある。世界と共有できる理念に名乗りをあげるという考え方もよい。
- エリア別計画ではなく、横つなぎでプロセスデザインによりアウトプットが積み重なると20年後どうなるという指針が良い。
- 指針の到達目標はソーシャルインクルージョン、健やか、誰もが使える水辺という様な大きな目標になる。それに向けて、これまでの活動の経験値の中でロジックモデルを作ってはどうか。
- 公共が持っている土地をどう再活性化するかという時代。既に行政が用地を持っており、活動を始められる種地があるのは大きなポテンシャルである。特に、東横堀川ならではの死水域を占用した利活用は強みになる。
- 3km圏で小さな活動をどれだけ作れるかと、みんなで共感できる絵を描く事が大事。水辺側だけだと限界がある。水辺の利用できそうな陸側の一緒にやっていく人や場所が結びつくと厚みが出てくる。
- 橋詰やヴィスタが抜けている場所など、双方から見る見られるの関係ができる場所の整備は効果的である。
- 経験から出てくるビジョンを沢山集めていく事が市民力をアップし、頭で考えたビジョンにならず体感的・実感的になってくると思う。社会実験を通してビジョンの吸い上げをやっていくのが、本来の経験主義だと思う。
- 企業は3年、市民協働は5年、一般市民に染み渡るのは7年。
- 「水」にフォーカスすると企業も関わりやすい。万博に向けて水の価値を上げて行くような方向も良い。
- 市民力をあげることが大事。人々がこのまちではこれができると思えることを増やしていくことで、公園はみんなで管理するものという意識にもつながる。

【方向性】

【指針構成】

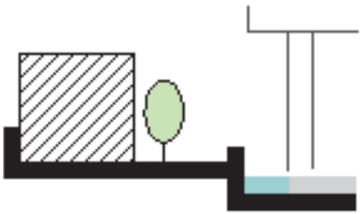
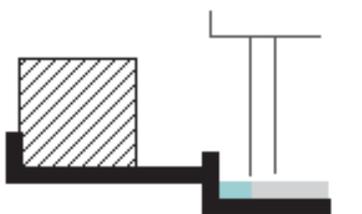
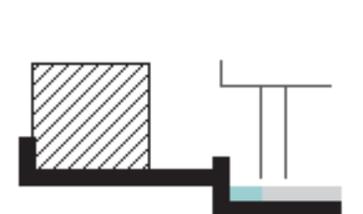
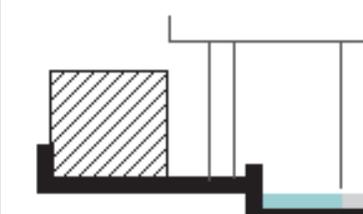
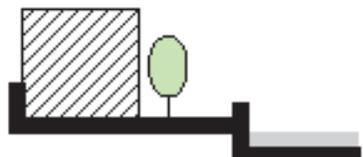
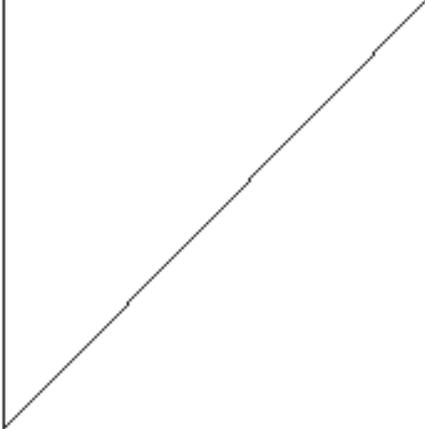
【進め方】

【官民連携】

⑤ 利活用が可能な空間の分布（東横堀川の死水域と都市公園区域）



⑥ 利活用が可能な空間の断面構成パターン分類

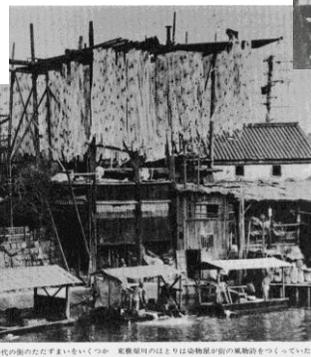
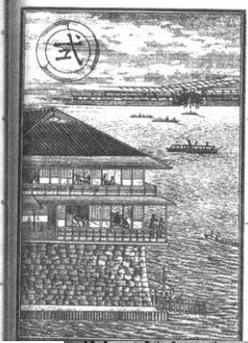
		都市公園		高架	
		あり	なし	近接	橋脚陸上
利用可能水面 (死水域)	あり	<p>1 建物と河川の間に公園が開設され利用可能水面がある</p> 	<p>3 建物と河川の間に未開設の護岸用地があり利用可能水面がある</p> 	<p>5 高架が低く建物に近接している利用可能水面がある</p> 	<p>6 橋脚が護岸用地にあり建物と高架が隣接し、利用可能水面がある</p> 
	なし	<p>2 建物と河川の間に公園が開設され、橋脚が一本のため利用可能水面がない</p> 	<p>4 建物と河川の間に未開設の護岸用地があり利用可能水面がない</p> 		

⑦東横堀川の歴史的空間特性

現状は川に背を向けて建物が建っているが、近世までは水辺の生業（染物や水運）とともに建物が川に向いて立っており、水面を一体的に活用してきた。

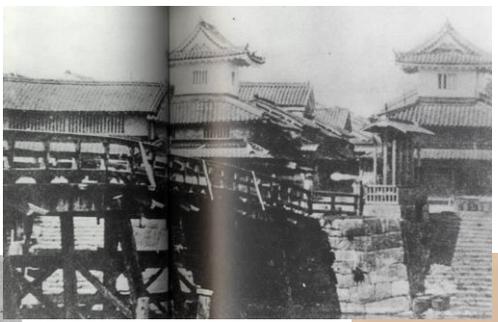


多景色楼が立地する葎屋橋周辺

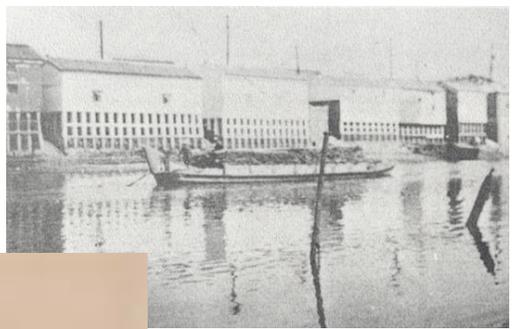


農人橋周辺の染物屋

出典：おおさか水辺の風景（大阪城天守閣）



檜屋敷と高札が橋詰にある高麗橋



高麗橋周辺の岸岐を備えた並び倉

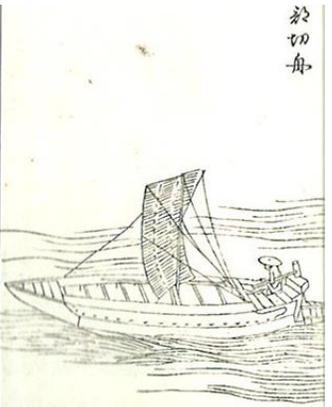


本町橋北東詰の府立商品陳列所

太閤下水や屎尿船など、循環型の環境都市としてのインフラや仕組みを備えていた。



現在も一部が現役で活躍する太閤下水



河内の水路網と屎尿船

2. 社会実験

①水上キャンプ生活

■開催概要

(1)目的

・水門で囲まれた安全な水面環境、阪神高速高架による屋根がかかった空間性を活かし、新たな形の水上空間の活用可能性を探るため、水上での長時間滞在の可能性や課題を把握する。

(2)実施内容

台船をリビング、サップボードを寝室として、水上での活動や宿泊を通して新しい水辺の楽しみ方を発見する水上キャンプ生活。アイデア公募でモニターを募集したところ15組の応募があり、合計5組を採用、4組が参加、1組は天候不良のため中止した。



サップボードと寝袋で寝室に。

台船：クッションやテーブルを配置しリビングに。

実施日	モニター	主な内容
9月25日-26日	30代夫婦/子ども4歳	水上シアター
10月1日-2日	40代父親/30代母親/子ども7歳	水上バー（一般参加有）
10月2日-3日	30代夫婦/子ども4歳	水上誕生日パーティ
10月9日-10日	40代男性	ソロキャンプ
10月16日-17日※	50代夫婦	水上ワークショップ



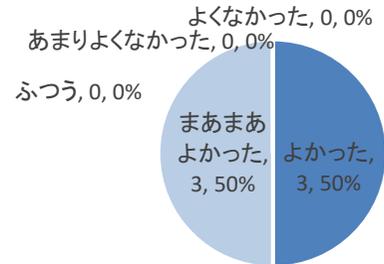
護岸を利用したシアター



台船上での水上バー

■今後につながる成果

●水上リビング、水上宿泊など水上での活動は、非日常感を味わえることや、身近な河川の知らない一面に触れられることから、その価値が高く評価され、東横堀川の魅力づくりの強みになることがわかった。



■明らかになった課題

●夜間の公園利用者や高速道路の大型車両通行による騒音、航行船舶の引き波による揺れなど、都市河川ならではの環境のなかで、安全性と快適性をどう担保するかが課題。

●今回はβ本町橋の協力を得て、同施設の占用水面内にて実施したため許認可が不要であったが、他の場所で水面活用を展開する場合には、占有や一時使用などの許認可制度の整理も必要となる。

②平野橋Open & Link

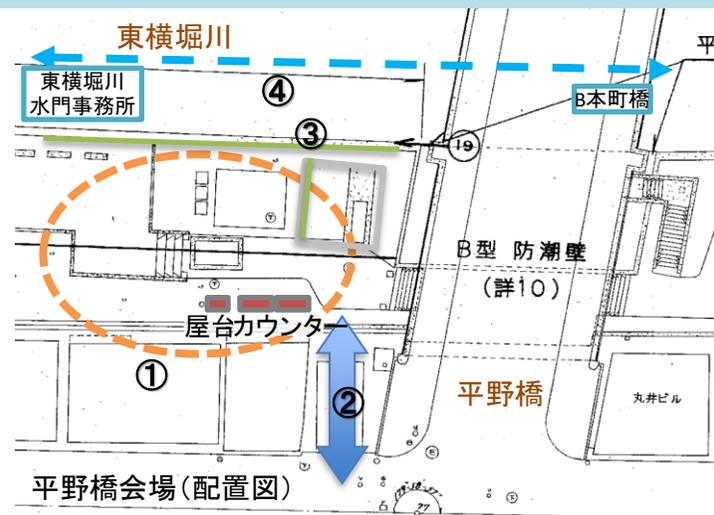
■開催概要

(1)目的

- ①沿川の事業者との連携による東横堀川らしい賑わいづくりの試行を行う。
- ②東横堀川沿川の水辺の公園・地先へのアクセス路の少なさによる川とまちの分断の解消に向けたアクセス路づくりの可能性の検証を行う。
- ③民地ー公園ー河川という、断面特性を活かした水辺空間の活用による賑わいづくりの可能性の検証を行う。
- ④β本町橋会場と平野橋会場の2会場を船でつなぎ、東横堀川沿川の連続的な水辺の賑わいづくりの可能性の検証を行う。

(2)実施内容

- ①沿川店と連携したイベント開催
- ②雁木空間を開放した水辺へのアクセス路づくり
- ③緑道、手すり等を活用した賑わい空間づくり
- ④水門と本町橋の間で「渡し」クルーズを運航
 - ・日時：11月28日(日) 11:00~18:00
 - ・出店者：沿川店舗5店舗



平野橋南側公園 14:00~18:00

- ・yacipoci 水辺で立ち飲み
- ・baobab グリーン&フラワー
- ・folk 本屋
- ・笑日志

平野橋発 【実行】 水辺カウンター
14:30
15:30
16:30
17:30

β本町橋 11:00~18:00

- ・baobab 針葉樹クリスマスリースWS
(13:00~14:00) 3300円(税込)
- ・ザ・トナカイズライブ
(①11:00~、②12:00~)
- ・βイチ 新鮮お野菜・お魚・ジビエの販売

β本町橋発 【実行】 キオスクカウンター
14:00
15:00
16:00
17:00

■渡し船■

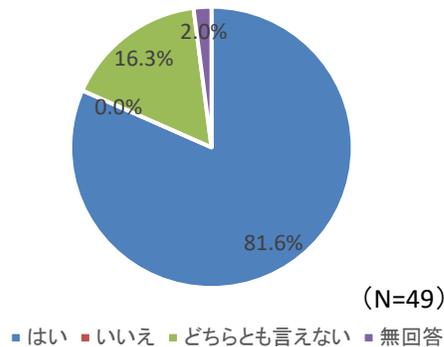


② 平野橋Open & Link

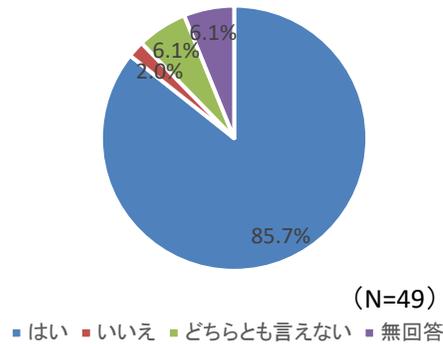
■参加者アンケートのポイント

- 参加者アンケートでは、81.6%が平野橋たもとの階段を活用した方が良いと回答し、85.7%が東横堀川を使ってみたいと回答した。
- 社会実験参加による変化では、東横堀川や大阪の川への親しみが高まった、東横堀川や水上空間の可能性を感じた、今後も参加したいが多かった。

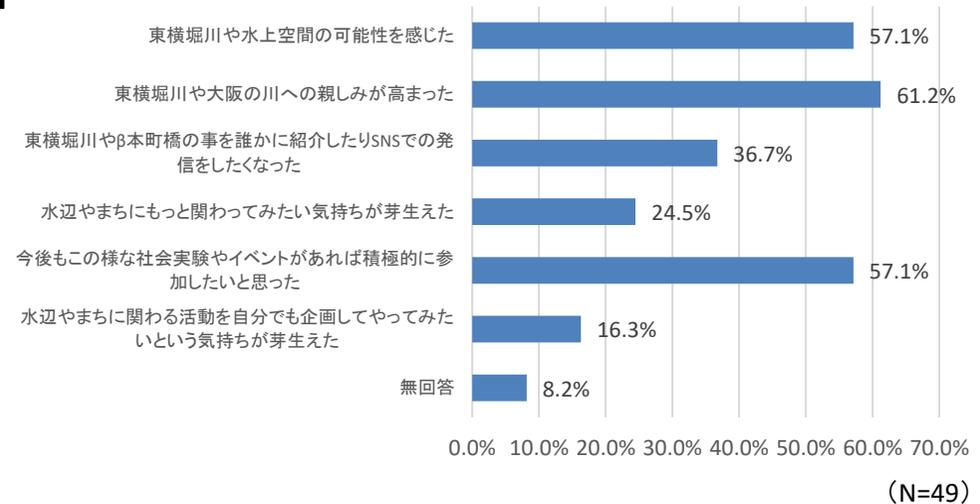
【平野橋たもとの階段の活用を
日ごろから公園に行くことができるアク
セス階段として活用したほうがいい】



【今回のOpen&Linkのように、
これから東横堀川を使ってみたい】



【参加した事による発見や変化】



■今後につながる成果

- 社会実験をきっかけに、橋のたもとの管理者である工営所から東横堀川水辺再生協議会が当該用地の鍵を借用し、近隣店舗が日常的に管理を担当する仕組みが整った。
- 近隣店舗・沿川店舗が出店し、今後も継続的に活用していきたい意識が高まった。

■明らかになった課題

- 今回は、社会実験として公園占用許可が認められたが、今後地域の店舗が主体となって実施するためには、公園および河川の占用許可について仕組みづくりが課題となる。

③ 今後のにぎわいのあり方についての意向

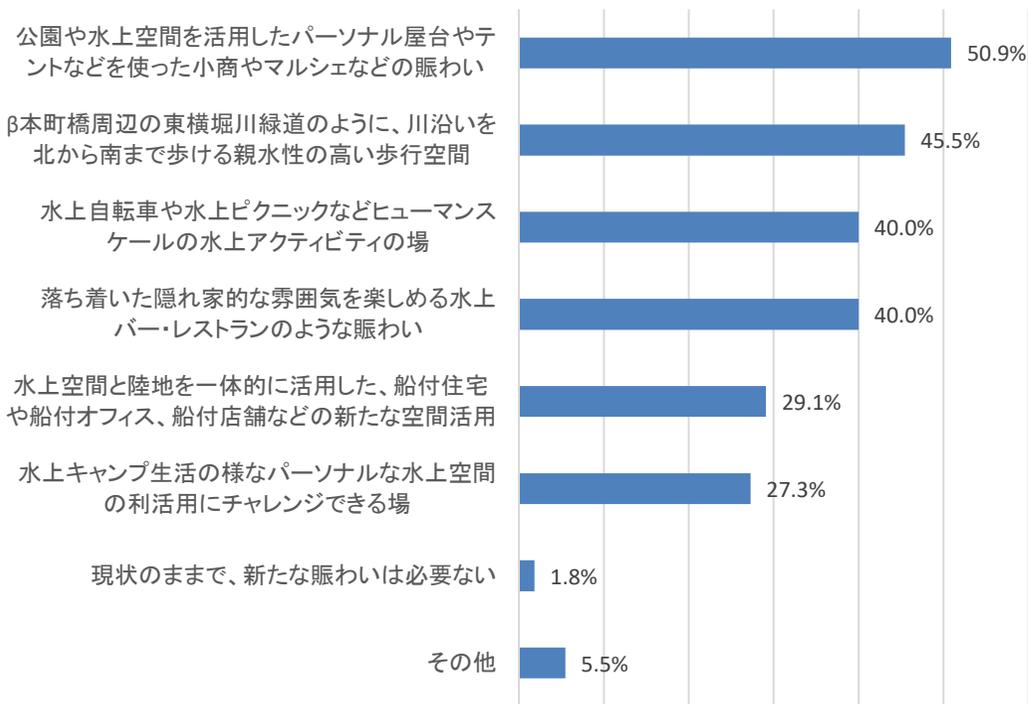
■参加者アンケートのポイント

- 東横堀川らしい賑わいのあり方について、公園や水上空間を活用したパーソナル屋台やテントなどを使った小商やマルシェなどの賑わい、川沿いを北から南まで歩ける親水性の高い歩行空間などが求められている。
- 楽しみ方をより充実させるためのツールとしては、公園や水辺の利活用につながるテーブルや椅子などのパーソナルツールへの関心が高い。

【水上空間の利活用や東横堀川らしい賑わいのあり方として、どのような賑わいがあれば良いか】

(N=55)

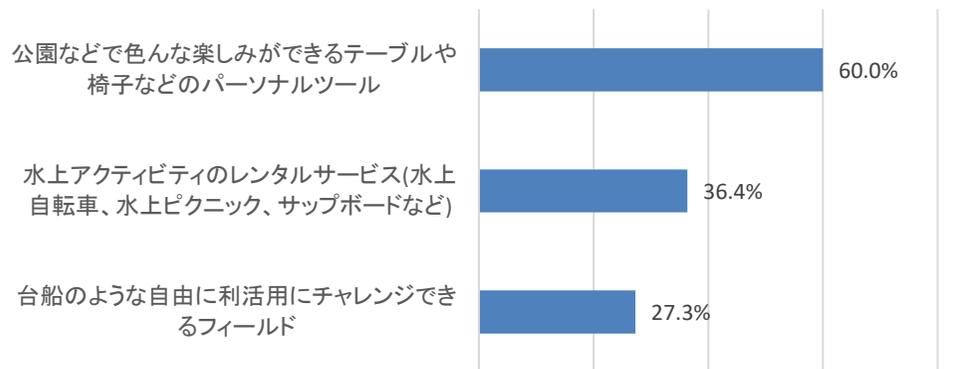
0.0% 10.0% 20.0% 30.0% 40.0% 50.0% 60.0%



【楽しみ方をより充実させるため、東横堀川の水辺に何があればよいか】

(N=55)

0.0% 20.0% 40.0% 60.0% 80.0%



3. これからの方向性

1. 東横堀川の今後を考えるうえで大切な視点

世界

① 地球規模の気候変動への危機感

- 世界が共有する環境への危機感、若い世代の環境意識の高さ
- SDGsを目指した世界的取り組みの推進
- 循環型都市技術の開発（シンガポール：Active, Beautiful, Clean Waters (ABC Waters) Programme）

日本

② 完成品が劣化していくという考え方によるハード整備の限界

- 行政に任せっぱなしの公共空間は管理が行き届かない
- 関わりたい前向きな市民が関わるできない
- 一度整備すると再度整備が難しい公共事業

③ 官民・公民が連携した横断的なまちづくり推進の機運

- 官民連携まちなか推進事業の展開（道路・公園・河川へ）
- 官民によるビジョンの策定とプラットフォームの構築

関西・大阪

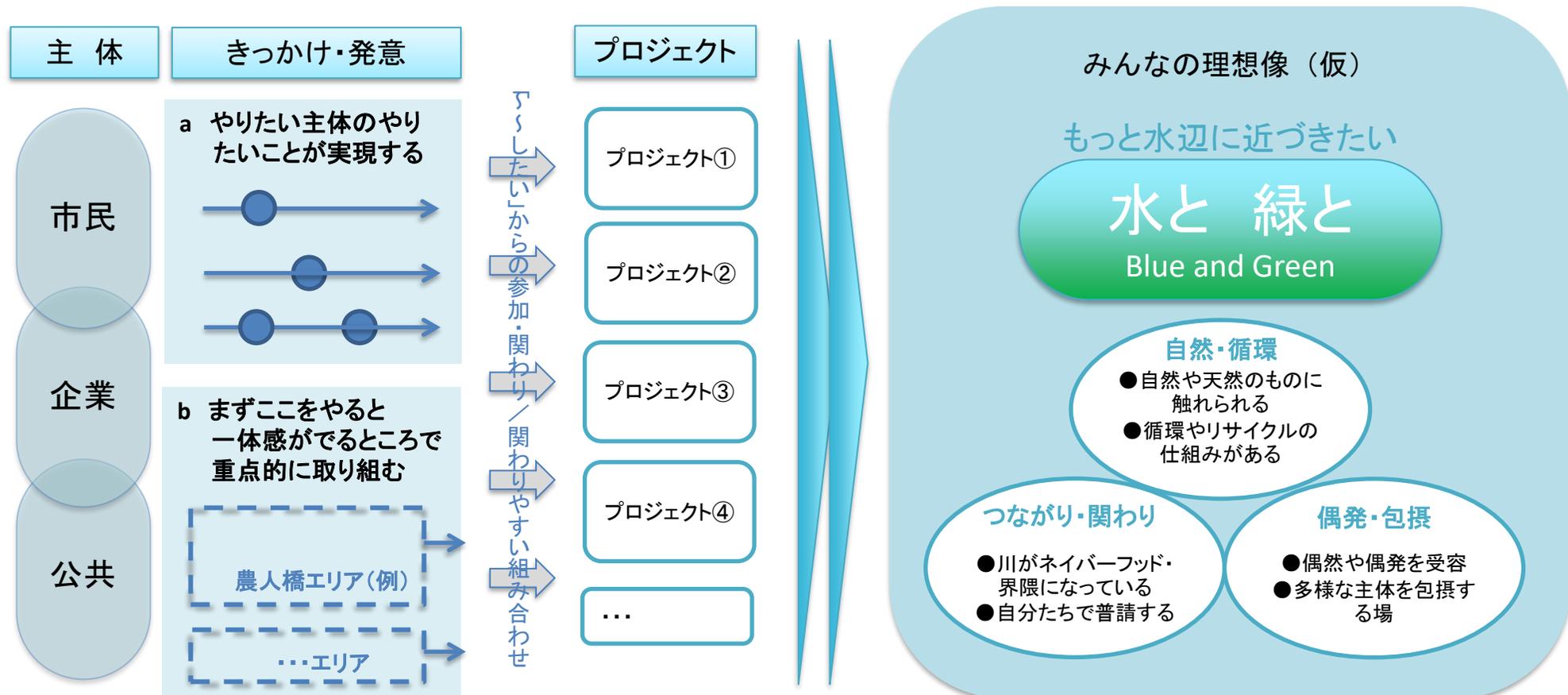
④ 都市と地方、生産地と消費地がつながりやすい大阪・関西の特性

- 川でつながる、流域
- 生産地と消費地のつながり
- 都市部と地方の意識が近い

⑤ 水都大阪のまちづくりの20年間を受け止めた東横堀川の次の20年間へ

- 「水」→「水と〇〇」
- 構想から計画、上から下 → 関係者が一緒に進める方針とプロジェクト
- スペクタクル・光景を重視 → 情景・生活景を育む

2. みんなの理想像(仮)と実現に向けたアプローチ



スパン

企業の参加: 一般的な事業計画期間である3年間の長さで取り組みを考える。
 市民の参加: 市民の参加が一つの形になる4~5年間を単位として考える。
 市民への浸透: まちの変化が広く一般に浸透するまでにかかる7年間という長さで考える。

3. プロジェクト・アイデア(例)

市民

Open & linkプロジェクト

- 普段は閉じている空間を開いてつなぐことで、市民を中心にできるところから水辺の魅力アップを図る。
- 誰でも参加しやすいお掃除からスタート。これをきっかけに日常清掃の体制づくりも行い、普段からの環境向上につなげる。
- 市民の足となる船を運航する。

東横堀川版舟屋プロジェクト

- 民地と地先とその前の水面を一体的に活用し、船付住宅や船付オフィス、船付店舗などを実現する。水辺の管理運営へのオーナーの参画も期待できる。
- 水面を占用した活用は、店舗やキャンプ等の滞在空間や、田畑等のオープンスペースとしての活用も考えられ、船の係留に限らない多岐にわたる活用が期待できる。

企業

水上×アート×環境をテーマにした企業連携プロジェクト

- 都市部における市民や事業者の活動を受け容れる貴重なオープンスペースとして、沿川の公園・水面・橋上・橋脚に展開する。
- 特に初期段階ではアートやを切り口とした水上の取り組みが効果的。環境的なアプローチも必要。

川とまちをつなぐウォーカブルパーク

- 護岸改修工事にあわせて、まちとのアクセスを向上しながら、歩きやすい水辺にする整備をすすめ、歩きたい魅力も創出していく。
- まちなかで貴重な緑や光、土の匂いや生き物の活動を感じることができる自然の連なりとする。
- 東横堀川をきっかけにして、都心の緑をつなぐ「パークコネクター」を大阪中へネットワークする。

公共

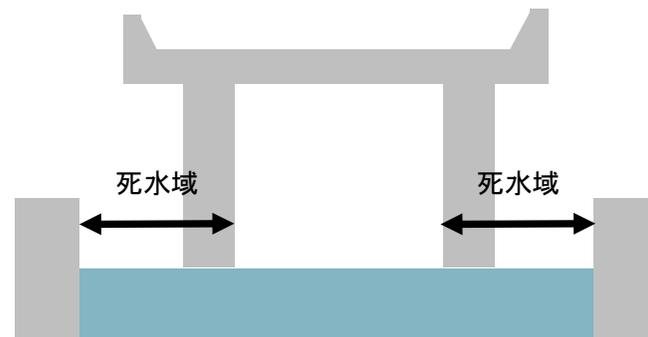
ヴィスタ・メイキング

- 「見る・見られる」関係性で効果的な場所について、ヴィスタが通るように護岸を切る。(上町台地の坂との関係、両岸セットで切る、橋詰を開く など)

4. 東横堀川における新たなシンボル空間創出・水辺のまちづくりの方向性

① 活用価値の高い連続した水面を最大限活かす

- ・ 高速道路の橋脚の外側は航路から外れており、治水上也流量断面としてカウントされないため、水面を占有した活用の可能性があり、水都大阪のなかでも随一の連続した水面活用のポテンシャルを持っている。
- ・ 東横堀川水門と道頓堀川水門に囲まれており、流れが穏やかな水面のため多様な活用の可能性がある。



② 水辺へのアクセスを増やして南北を通して歩けるようにする

- ・ 東横堀川全体において今後護岸改修工事が本格化する予定となっており、将来的には沿川全体に公園緑道が整備される計画となっている。
- ・ 都心の貴重な自然に触れられる水辺として川全体を通して歩けるようにする。
- ・ 閉じられた沿川の空間を開いて水辺へのアクセスを増やす。



沿川に多数点在する閉鎖空間

③ 沿川のプレイヤーや企業が活躍できる仕組みを整える

- ・ 地域によるお掃除やイベントなどの市民活動、界隈の個性的な店舗や地元企業などの水辺活用などを実現するための公園及び河川のルールを整える。



多様な主体の活動を受入れるβ本町橋

④ 公共整備と民間事業を連動して一体的な水辺空間づくりを目指す

- ・ 東横堀川全体において今後護岸改修工事が本格化する予定となっており、将来的には沿川全体に公園緑道が整備される計画となっている。この動きと民間事業を連動させることで、民地一公園一水面を一体的に活用する空間づくりを行う。

⑤ 埋もれている歴史的な文脈を発掘して多様な主体の共感をつなぐ

- ・ 大阪城の外堀として開削された東横堀川は、歴史的な文脈を受け継ぐ町名などの資源が埋もれている。新旧・内外含めた多様な主体の関わりを育んでいくうえで、共通言語となり得る歴史的な文脈を大切にす。



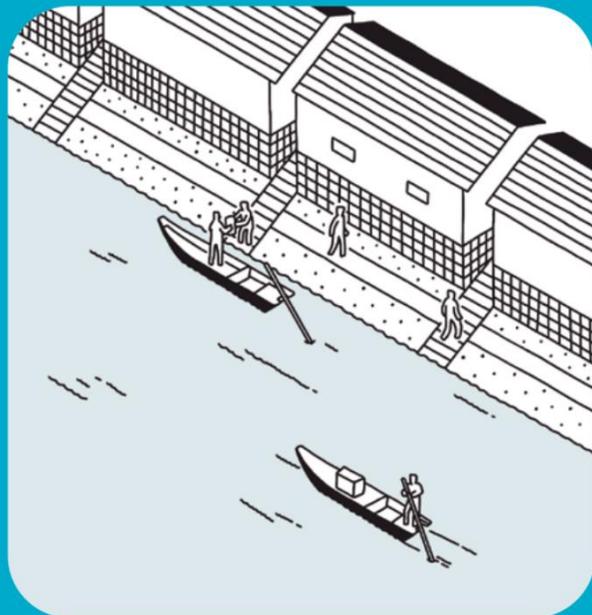
高麗橋周辺の岸岐を備えた並び倉



大阪市都市計画図
(都市施設)

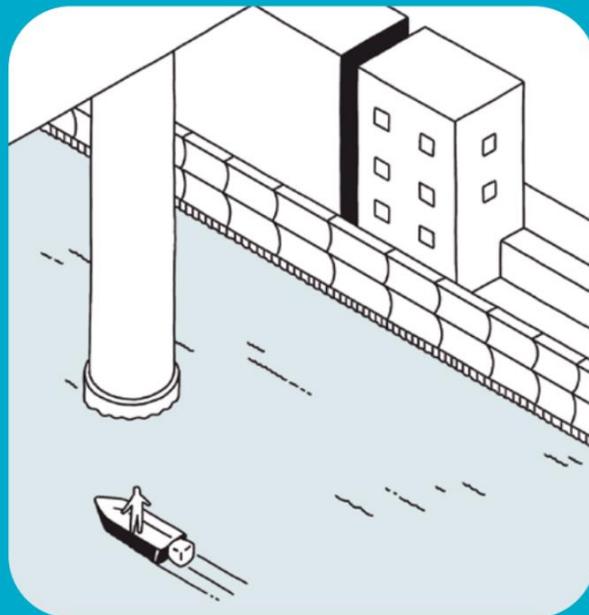
5. 歴史的的文脈をふまえた水辺の空間の変容イメージ

むかし



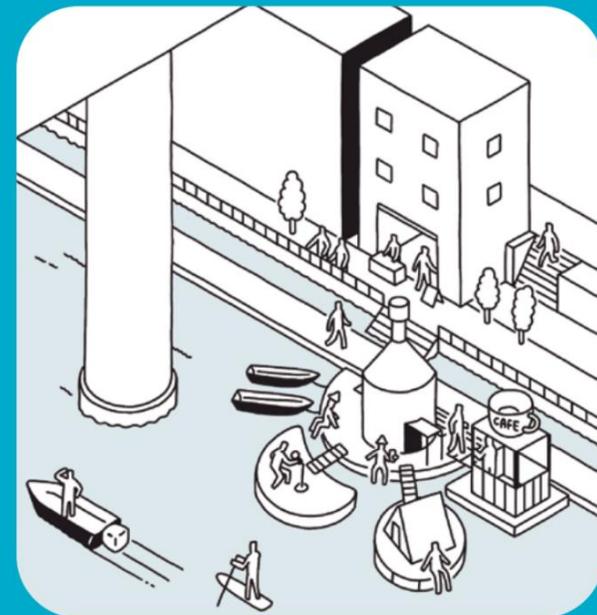
江戸時代、「浜(はま)」と呼ばれた水辺は、水運の荷揚げ場や蔵として活用された。まちから川へつながる階段護岸「岸岐(がんぎ)」や、水際の通路「犬走り」があり、みんなが使いやすいように維持されていた。

いま



昭和初期から建物が建てつまり、岸岐も減少。高度経済成長期には、川上に阪神高速道路が、川沿いに背の高いコンクリート護岸が整備され、川とまちが分断。誰も近寄れない水辺は、良好な環境維持が難しい状況に。

これから



2021年に開設した東横堀川初の水辺拠点「β本町橋」では、水面を活用した係留施設が実現。これと同じように、今後長期的に進められる護岸の耐震改修にあわせて、オープンな水際空間づくりと積極的な水面活用を検討。

ING

東横堀川



いま東横堀川は、みんなのINGを
積み重ねることによって、変わろうとしています。

7. 情景を生み出す空間創出に向けた断面活用イメージ

